徳島新聞　２０２２年（令和４年）３月７日　月曜日（２０）スポーツ掲載
徳島新聞社提供

第3種郵便物認可

四国で輝け　インターハイ県勢有力選手　④

強豪校の伝統受け継ぐ

生光学園

女子砲丸投げ　川口 由眞

男子円盤投げ　仁木 星之介

生光学園の投てき陣は昨年夏、全国高校総体（インターハイ）の陸上フィールド部門の男子学校対抗で2度目の優勝を果たし、全国有数の強豪としての地位を確かなものにした。伝統を受け継ぐが、今夏、徳島で行われるインターハイの女子砲丸投げで優勝を狙う川口由眞と男子円盤投げで入賞を目標に掲げる仁木星之介だ。共に2年生。刺激し合いながら練習場で汗を流す。

生光学園高・女子砲丸投げの川口由眞（左）と男子円盤投げの仁木星之介

川口は1年生だった2020年10月の全国高校大会で優勝し、一躍注目を集めた。この時にマークした14㍍37は、高校1年の日本歴代1位記録。

一緒に出場した先輩2人が近くにいる安心感から伸び伸びと大会に臨み、好結果につなげた。

ところが、さらなる躍進が期待された2年生になってからは一転して不調続き。右手首を痛めるなどして、昨年7月の初めてのインターハイは7位に入るのが精いっぱいだった。原因は分かっている。「1年の時は勢いと気持ちで運良く優勝できたけど、力以上の結果が出てしまい、慢心やプレッシャーがあった」

年末年始に大分県で行った陸上部の合宿では、豊永顧問から「グライド投法」の足の動かし方などについて指導を仰ぎ、スピードを上げて投げることを意識するようになった。成果は早速、2月の県強化投てき記録会で表れた。自身3番目となる13㍍87をマークしたのをはじめ、計12回の試技は全て13㍍台。確かな復調の兆しをつかんだ。

「いい流れをつくってインターハイに臨みたい」。苦しい時期を乗り越えた川口は今、表情に充実感を漂わせながら、集大成の夏を見据える。

川口の影に隠れがちだった仁木は、円盤投げとハンマー投げの2種目に出場した昨夏のインターハイが高校での初めての全国大会だった。結果は両種目とも決勝進出を逃し、全国の壁の高さを実感させられた。

185㌢、103㌔の恵まれた体格ながら、腰と膝が弱く、体に負荷を掛けたトレーニングができなかった。激しい練習に耐えられる体を一からつくり直すため、冬場にいったん98㌔まで減量。現在は筋肉を付けて体重を元に戻すためのトレーニングを続けている。

インターハイで入賞に照準を絞っている円盤投げの自己ベストは44㍍。入賞ラインとなる45～46㍍まで記録を伸ばすため、月、金曜以外の週5日は練習場に立ち、土、日曜は100～150本を投げ込む。

現在の陸上部は川口と1年生の1人を合わせた3人で、今春には4人の頼もしい新入生が加わる。主将として少数精鋭の部を束ねる仁木は「川口さんだけに頼るのではなく、自分も全国の表彰台に立てるように頑張る」と決意をにじませている。

（須見千次郎・写真も）